

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

### 一年間の研究経過報告と今後の課題 植 村 勝 彦

1. 1970年以来継続してきた「いわゆる過疎地域の家族関係」に関する共同研究は、今年度に入って一応所期のデータ収集の完了をみ、分析の段階に至っているが、私は従来からの関心の視点に基づきつつ、次のような作業を進めている。

イ 過疎地域からの離村者に対する面接調査に関する分析（昭和46年度科学研究費）は、その一部を今年度の日本教育心理学会総会で「いわゆる過疎地域の問題(10~12)」として久世、松田両氏とともに発表した。また、これを基にし、発表時点でデータの得られていなかった地域をも加えたより詳細な分析の結果は、本年度の紀要には間に合わなかったが、過疎研究グループの共同研究として次年度の紀要に報告するべく準備中である。そこでは、離村理由類型との関連で離村者の「ふるさと」観を明らかにすることを試みているが、意識および行動の係留点としての「ふるさと」の問題を **Community Psychology** の方略の単位のひとつとして利用できないのか考えるに至ったが、まだ明確に構想を提出するところには至っていない。

ロ 上記の離村者の調査とは対照的に、過疎地域居住者の「留村理由」に関して、「過疎地域住民の留村理由の分析の試み」と題して今年度の日本社会心理学会大会で発表した。これは、これまで分析を進めてきつつある「資料集」の「質」的データを補完し、また妥当性を検証するための手掛りとしようとするものである。一町村のみの結果であり、また必ずしもデータの解析に成功しているとは言えない点もあるが、過疎以外の町村との比較や、サンプルの増大、留村要因としての指標の抽出などを通して、分析の精度を高めたいと目下考慮中である。

ハ 「資料集」を用いての分析に関しては、昨年度の紀要の報告に引き続き「私的共同活動」の諸側面に焦点を合わせて地域共同体意識の変容の様相を扱うことを予

定していたが、まとめるには至らなかった。次年度への継続を期して準備を進めている。

ニ 既に述べたように、「過疎研究」は一応のデータ収集を完了したが、長野県上村（特に下栗地区）については改めて追跡研究を企図し、本年新たに調査を行なった。これまでの結果得られたいくつかの問題点にのみ焦点づけ、その後の意識・態度の変化の経緯を推えようとするものである。目下継続中であり、まだ整理の段階には至っていない。

ホ 以上に述べた継続課題とともに、新たな課題として次のものを考えている。長野県上村と島根県頓原町については、「資料集」による在村者のデータと離村者のデータが対応したものとして整っており、この両者のつき合わせを通して過疎問題のもつ多様な側面を同時に統合した分析が可能になると考えられるので、取組んでみたい。

2. 昨年の本欄で触れた、社会構造の形態を異にする地域における、住民の生活意識の変容に関する調査研究は、その後愛知県下の三町村を対象に実施し、今年度の年報社会心理学第14号に「地域社会構造の変化に伴う住民の生活意識の変容」と題してまとめる機会を得た。今後とも、さし当っては地域社会の変化と住民意識の変容との関連を様々な側面から追究することを通して、地域社会心理学の問題と構想を考えてゆきたい。

3. 時間的展望の研究に関しては「青年の時間的展望と職業に対する態度」として今年度の青少年問題研究第22号にまとめたが、この研究に関しては構想が中断しており、目下のところ新たな展開は意図していない。

4. 愛知県コロニーにおける「在宅心身障害児対策に関する基礎的研究」のプロジェクトへの参加（県嘱託）は、現在のところ諸般の事情から十分計画通りの進展をみていない。

### 研究経過報告 久 世 敏 雄

#### 1. 社会化に関する研究

##### (1) 幼児期の社会化に関する従断的研究

この課題について、共通の関心をもつ者が集まり、園児の依存および攻撃行動の観察（初年度）を行なってい

る。母親の養育に関する資料も収集できた段階であり、今後、データの検討に入る予定である。

(2) 児童期の社会化過程に関する縦断的研究

これは、名古屋市青少年問題協議会、名古屋市教育委員会による「児童の心身発達の追跡研究」の一貫として行なわれており、児童の社会的行動——達成行動、自立行動、道徳的判断および性役割行動の要因分析に主力を注いでいる。

2. 青年期に関する研究

最近、青年心理研究の展開過程について若干、考察する機会に恵まれた。「青年期へのアプローチの仕方」と題するテーマのもとに、青年心理研究の現状、青年心理研究の方法の現状、さらに、青年心理研究への理論的枠組等を検討した。しかし、この青年心理研究の方法論の実証的検討は、今後の課題としてのこされた。

つきに、青年期の自我にかかわる問題として、われわれは、困った場面における自己開放性について、中学生および大学生を対象に研究を進めている。大学生の自己

開放性についての検討は、青年心理学研究会（代表依田新）編「わが国における青年心理学の発展」に、<sup>注1</sup>「困った場面における自己開放性についての一研究」として蔭山氏と共同で投稿した。また、「困った場面における両親への信頼感と自己開放性についての一研究」を本巻に投稿した。

さいごに、中学生、高校生の社会的態度——保守的、革新的および大衆社会的態度——について、附属中学、高校生を対象に、大学院博士課程速水敏彦と検討中である。この成果は、他日発表の予定である。

なお、上記以外の共同研究として、過疎グループ会員とともに、「いわゆる過疎地域の家族関係」について離村者の追跡調査の資料から、出身地とのつながりや都市での適応状況等の検討を進めている。（1973.12.20）

注1 困った場面における自己開放性についての一研究（蔭山氏と共同）青年心理学研究会（代表依田新）編「わが国における青年心理学の発展」金子書房 1973

課 題 お よ び 現 況 水 野 欽 司

1. 一年は短いもので、雑件に追い廻されているうちに、あっさり過ぎ去ってしまった。従来からのテーマである多次元データの解析法の研究については部分的な検討を進めることができたが、目標にしていたそれらの体系づけのレベルにまでは至らなかった。これらの研究領域は48年9月の日本行動計量学会の発足にみるように、急ピッチで新しい拡張期に入っており、せいぜい中央での動向に遅れないよう努力したいと思っている。

文部省科学研究費総合研究（A）「応用多変量解析の研究」（代表者、統数研林知己夫氏）については、文献研究と一部のプログラム・テストの域に留まり現在その先を目指して検討中である。

2. 学外研究グループとの共同研究としては以下のものがある。これらはいずれも調査を主体とする研究であ

る。

愛知県教育委員会よりの委託研究「学歴評価に関する研究」（代表者、愛教大橋爪貞雄氏）、および名古屋市教育委員会・家庭教育問題専門委員会のプロジェクト「親子の価値観のずれに関する研究」（代表者、名大塩田芳久氏）が、現在、分析作業中である。

中部広告研究会（電通名古屋支社）におけるマーケティング・データの分析技術の研究として、47年度に「耐久消費財による単調順位パターンの作成」（統伸彦と共著、中部広告研究、4号）を報告したが、48年度ではこれを本格的に進めるものとして「調査データの一貫処理システムの設計」なる主題の下で継続中である。

いずれの場合にも、調査データの分析面で新しい試みを取入れることに努力している。

研 究 の 経 過 に つ い て 大 橋 正 夫

1. 対人関係の構造について、これについて私の考え方を発表する機会が与えられた（前巻参照）が、それに対して若干の反響があった。しかし、まだ不十分なものであるので、今後とも考究を続けていく予定である。

2. 印象形成の研究。前年度は、最年度にひきつづき、本紀要に2篇の報告をした。その1は、「パーソナリティの印象形成における情報統合過程の研究」の第3報告である。ここにおいて、従来の線型モデルでは明ら